

2019年12月21日(土) 国際クリスチヤン婦人会(ICWC)主催による集まりでのメッセージ(証)

日本フリーメソジスト教団牧師 林 利行

「タイトル 神の選びと真実」

茶道の言葉に「一期一会」があります。一生に一度だけの機会。生涯に一度限りであることを意味します。今夜の集まりで皆様にお会いできたのは、私の人生にとって一度きりのこととして最後の言葉として語らせていただきます。

私の両親は大阪の南区なんばで寿司屋を営んでいました。私は男兄弟四人の二男として生まれ、中学一年生の時に店の近くにありました日本フリーメソジスト教団大阪日本橋教会に導かれました。

中学三年生で受洗をし、高校三年生の春、卒業後の進路を思いめぐらしていた時、聖書のみ言葉に出会います。

ヨハネによる福音書 15:16

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」

このみ言葉に出会う前まで、私の人生観は「人生は選択の連続である Life is a series of choices.」というウイリアム・シェイクスピアの名言のように、人生の主体者は私自身であって、すべては自分の取捨選択によって作りあげていくものだと思っていました。

しかし、この私を選んでくださった父なる神様の御心があることに気付いたのです。「私の人生を神様の選びに委ねます」と祈って、高校卒業後、フリーメソジスト教団が指定する大阪キリスト教学院神学部へ入学しました。6年間の学びを経て、私はフリーメソジスト教団の牧師として按手を受け、24歳の時から牧師として、教団内3か所の教会を牧会してきました。その歩みは決して平坦な道のりではありませんでした。しかし、選んでくださった神様の導きが私の人生を整えていました。

脳科学では「私たちの脳は、主語を理解できない」と言います。私たちは他人のことはよく理解できても、自分自身を認識することが難しいのです。それ故に何かをすることによって、自分の存在を他者に認めてもらうか、評価されることで自分自身の価値を見い出そうとします。

例えば来年行われる東京オリンピックの出場選手は、メダルを取ることで自分の存在をアピールできます。そこで認められることに生きがいを見い出しているからです。

私たちはそこまでいかなくても、日々の関わりの中で、自分を分かってもらいたい、評価されたい、誰かに認めてもらうことで、自分が生きている証を見出そうとしていませんか?

私の人生も 2011 年までは、順風満帆、公私ともに順調な人生を歩んでいました。教団の牧師としての経験や立場が認められ、いろいろな働きの中で指導的な役割を担い、社会的にも評価されて、日々の忙しさの中で充足感を覚えていました。

しかし、2011 年の夏、牧師を志してアメリカへ留学した息子が 21 歳で突然亡くなりました。死因は自死でした。私は以前から息子が鬱々としていた現実を知っていました。インターネットを通してテレビ電話をし、息子が話すその言動や苦しみ、痛みを目の当たりにしてきました。日本とアメリカとの距離があって、ホストファミリーの友人の牧師に息子のことは任せていたのです。

学校の夏休みが終わって、9 月から始まる新学期には、息子も回復するだろうと思っていたのです。私自身は日々のあまりにも忙しさに埋没されていて、息子と向き合うことをおろそかにしていました。

訃報に接し、家族と共に渡米し、葬儀を終えて帰ってきました。しかし、この愛する息子の死という現実からは逃れられません。息子と共に将来を語り合った夢は失われました。私のぽっかり空いた大きな心の痛みは、牧師として、父親として失格者であることを認めざるを得ませんでした。

しばらくして、私は喪失感からくるうつ病を発症して、人生は一転します。私の病名は双極性障害と診断され、もはや生きることが苦しくなりました。通院してもよくならず、悲観的な思いで過ごしていたある夜のことです。「わたしはあなたのとがを赦し、わたしはあなたの罪をゆるした」と、一方的に語られてくる声と言葉に出会いました。その言葉の響きは今も忘れることができません。フリーメソジスト教団は保守的であって、このような靈的なことは否定的です。しかし、私にとってはあまりにも鮮明な言葉であったので、知人であり、神学的にも整った友人にこの話をしました。この先生は「林先生、あなたは神の言葉を聞いたのです。神だけが罪を赦す権威をお持ちの方で、この言葉を語れるのは、神以外にいないからです」と言ってくださいました。

だからといって、私の病いは悪化するばかりでした。鬱からくる症状として、何度も死にたいと思ったかわかりません。私の弟が「お兄さん、この病は沢山の方に祈ってもらい、支えてもらわないとよくならないよ」と言ってくれて、そして神様は私の周りの中から病気の療養のために沖縄へ私と私の家族を導いてくださいました。

2012 年 4 月から北中城村にあります若松病院のチャップレンとして、主に高齢の認知症の方々への心のケアにあたりました。多くの認知症の方々に囲まれながら、私自身の姿を鏡に映しているようで、この方々と共にすることで安らかな気持ちになっていきました。

一人の優しいクリスチヤンのお婆ちゃんに出会います。この方の額には大きな傷があって「この額の傷はどうされたのですか」と尋ねると、切々と過去の記憶を語ってくださいました。かつてこの方と家族は慶良間諸島に住んでいました。

1945 年 3 月 26 日この日をしっかりと記憶していたお婆ちゃんです。アメリカ軍が慶良間諸島に上陸します。その一週間前、島民の男性は日本軍に協力するようにとの要請があり、出て行った父親は自宅に帰ってくることはありませんでした。

戦局が厳しくなってきた時、島民は小学校へ集められます。当時、この方は中学一年生で、母親と乳飲み子、兄と姉と弟と6人で小学校へ行きました。校長先生は校庭に集まつた島民に、「私は今から自決する」と話して姿を消しました。そして各家庭に手榴弾三個が配られます。母親は知人からもう一つ手榴弾をもらって自宅に帰り、庭に並ばせて子供たちに手榴弾を手渡します。

この方の見ている前で、乳飲み子を抱いた母親は自爆、続いて兄さんが、姉さんが自爆します。最期に手渡された一つの手榴弾をこの方が握り、弟と抱き合いながら信管を抜きました。その手榴弾は不発弾でした。目を開いた弟は辺りの惨状を見て怖くなり、その場から逃げていきます。

しばらくして見届けに来た叔父さんは、この方の前に一本の棒を置きます。「自爆できなかつたお前は、この棒で自ら撲殺せよ」との暗黙の了解です。そして、この叔父さんはこの方の見ている前で、持ってきたロープを木にかけて自死します。この女の子は自分の目の前でこの現実を見届けます。そして、渾身の力で自らの頭を叩きます。額の傷はその時のものだと話してくださいました。

気を失ったこの方が目を覚ましたのは、手当を受けた米軍キャンプの中でした。救護にあたつたアメリカ兵から片言の日本語で「生きてください」と頼まれます。このテントの中で弟と再会し、ひとり残されたこの弟のために姉として生きていくことを決心されました。

私はこのお婆ちゃんに「よく生きてきましたね。その強さを私にもください」とお願いした時、「ただ生きてただけだよ」と言われました。その言葉に私は「そうだ、ただ生きていけばいいんだ」と「ただ生きる」という言葉を自問自答し、それだけで平安を見出すようになります。

もはや牧師としての肩書も要らない。今まで培っていたものは、私にとって何の益にもならなかつた。人に認められなくてもよい。ただ息をして、生きてるだけでいい、ここから生きるというスイッチが私の心と身体を回復していきます。

毎日認知症の方々と接しながら、私の気持ちが穏やかに回復していく時、大阪で出会つたあの時の声が、言葉が再び聞こえてきます。「わが子よ、わが子よ」と。私はこの時はつきりと理解しました。聖書が記す神は、私の天の父であることを。そして、私はその子である事実を受け留めました。私は神の子に生まれ変わりました。誰が私を認めなくとも、私の父である神が語ってくださいました。

◎イザヤ書 43:4 「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」この事実を打ち消すことは決してできません。

しばらくして、主治医から「あなたはこの病から生還された数少ない方です」と言われ、病は癒されました。

イザヤ書 63 章 8、9 節

◎ 63:8 主は言われた／彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。そして主は彼らの救い主となられた。

◎63:9 彼らの苦難を常に御自分の苦難とし／御前に仕える御使いによって彼らを救い／愛と憐

れみをもって彼らを贖い／昔から常に／彼らを負い、彼らを担ってくださった。

◎イザヤ書 63 章 16 節

63:16 あなたはわたしたちの父です。アブラハムがわたしたちを見知らず／イスラエルがわたしたちを認めなくても／主よ、あなたはわたしたちの父です。

もう一度言います。天の父なる神様は私の父であり、私はその子である。という事実に目覚め、新しく生まれ変わったのです。

私が神の子として回復した時、神の国の世界を思いました。私も必ずこの世を去る時が来ます。神の子とされた私に用意されている世界は神の国です。そこに至った時、私の傍らにもし息子の姿がなければ、私にとって神の国ではありません。愛する家族が一人でも欠けたら、そこは私にとっては神の国ではないのです。その時、私は父なる神に祈ります。「父よ、私は愛する者のために命を捨てます。そして、愛する者をここに着かせてください」と。

神の子イエス・キリストの心が記されています。

ヨハネ 10:17 わたしは命を、再び受けるために捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。

父なる神と神の子とされた私の心が一つになる経験をして、私の心、魂は全き平安に満たされます。

昨年四月に若松病院との契約が満了し、現在は介護現場で介護士として働きながら、3か所の教会で毎週日曜日の礼拝メッセージを担当しています。

このような経験を経てきて、今皆様にお伝えしたいことは、

私はプロテスタントという牧師ではないです。だからと言って、カトリックの司祭でもない。いわゆる、組織に属する牧師ではないです。冒頭のみ言葉「ヨハネによる福音書 15:16」に記されているように、神に選ばれ、導かれている牧師です。

あなたもイエス・キリストを信じた時の真実な気持ちは、組織の信者になるためではなく、今も生きておられるイエス・キリストにつながるクリスチヤンとして洗礼を受けられたはずです。

神の国はクリスチヤンと呼ばれるイデオロギーや教派というカテゴリーに属する者たちの国ではない。また、罪人という意識をもった者たちが入れる国ではない。父なる神からわが子と呼ばれ、父の思いを受けた、父なる神に愛されている神の子らの国です。父の思いで一つとなり、神の子とされた身分でお互いを認め合う国です。

ヨハネの福音書

◎11:51 これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。

◎11:52 国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。

四福音書におけるイエス・キリストの十字架の意味は、明確に示されていないというのが神学の定説です。四福音書はイエス・キリストの十字架とよみがえりの事実を伝えているのであって、その意味はパウロの手紙、ペテロの手紙において具体的に明らかにされています。しかし、このヨハネの福音書は預言の言葉として、明確に一つのメッセージを聖霊によって伝えています。それは「散らされている神の子たちを一つに集めるために」です。

今日、私たちははつきりとした信仰を確立しましょう。

ヨハネ 3:3 イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」と言われました。

私たちは天の父から「わが子よ」と呼ばれ、神の子として新しく生まれ変わり、神の国に生きる者となりました。父、子、聖霊の三位一体の中にだけ永遠の命があります。その命の関係の中に、イエス・キリストの十字架と復活によって招かれているのです。

終末の様相を呈するこの時代に父なる神から選ばれ、召された牧師として、私には明確なメッセージを天の父から与えられています。それは「散らされている神の子たちを一つに集めるために」父なる神の思いを語れというメッセージです。

【新共同訳】

第一ヨハネ 3:1 御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかつたからです。

私たちはこのみ言葉をそのまま自分に語られている父なる神の言葉として受け入れましょう。私たちは父の思いで一つとなり、神の子としてお互いが一つの命、一つの交わり、一つの共同体を整えていくのです。

私の残りの生涯は「散らされている神の子たちを一つに集めるために」ささげていきます。